

論文審査及び最終試験又は学力の確認の結果の要旨

① 乙	氏名	安田 優	
学位論文名	Incidence of Mid-Term Prognostic Events in Patients With Acute Coronary Syndrome During the Late-2010s in 2 Tertiary Hospitals in a Rural Area of Japan: A Temporal Comparison		
学位論文審査委員	主査	長井 篤	  
	副査	岸 博子	
	副査	矢野彰三	

論文審査の結果の要旨

虚血性心疾患は世界的に死因の上位を占め、その中でも急性冠症候群（ACS）は適切な対処がなされないと致命的転機をとる疾患であり、予後を改善することは世界共通の課題である。1990年代から2000年代にかけて、ガイドラインに基づく治療管理の確立により、ACSの急性期及び慢性期の予後が改善したことが報告されている。一方で2010年代以降、特に2010年代後半のACSの予後についての報告は少ない。申請者は島根県出雲市における、2010年代後半とそれ以前の期間におけるACSの中期予後を調査した。2009年8月から2018年7月に当院及び島根県立中央病院にてACSの診断で入院加療を行い、生存退院した895例を対象とした。対象は退院日によって3群に振り分けた（T1：2009年8月～2012年7月、T2：2012年8月～2015年7月、T3：2015年8月～2018年7月）。主要評価項目は退院後2年以内の主要心血管イベント（MACE）として全死亡、ACSの再発、脳卒中、副次評価項目は大出血と心不全入院とした。主要評価項目では、全ACS症例で、MACEの発生率は他の2群と比較してT3群で有意に低かった。ST上昇型心筋梗塞（STEMI）症例において、MACEの発生率は他の2群と比較してT3群で低い傾向を示した。非ST上昇型心筋梗塞（NSTEMI）症例において3群間に統計学的差はなかった。副次評価項目である大出血と心不全による入院の発生率は、全ACS症例及び各サブグループにおいて3群間に統計学的差はなかった。この結果から、申請者は2010年代後半のACS症例の中期予後は改善しており、主にSTEMIのイベント発生率の低下に由来すると結論づけた。治療法の進歩、ガイドライン遵守の徹底に裏付けられ、今後更にACSの予後改善が見込めることを示した臨床的に価値ある研究であり、博士（医学）の学位授与に値すると判断した。

最終試験又は学力の確認の結果の要旨

申請者は、ACS治療の進歩に伴う予後調査を多数の自験例を用いて行い、中期予後の改善とその要因について分析した。本研究は、ACS転機改善に資する貴重なものであり、学位に値すると判断した。

（主査：長井篤）

申請者は島根県出雲市の2医療機関で2009年8月から2018年7月の間にACSの診断で入院加療し生存退院した395例の中期予後を調査し、2010年代後半の中期予後が改善する事を見出し、その改善はSTEMIイベント発生率の低下に由来すると結論づけた。本研究はACSの予後解析に関する重要な知見であり質疑応答も的確で関連知識も豊富である事から学位授与に相応しいと判断した。

（副査：岸博子）

申請者は、急性冠症候群症例の中期予後が2010年代後半で改善したことを示し、詳細な分析を加えた。本研究は臨床医学における重要な知見である。申請者の的確な質疑応答及び豊富な関連知識より医学博士の学位授与に相応しいと判断した。

（副査：矢野 彰三）

（備考）要旨は、それぞれ400字程度とする。